

カビになりたい

島崎碧

生まれ変わったらカビになりたいと、大真面目に言ったものだが、気づけば笑いものにされていた。こちらを指さしながら「何でまたカビなの」と涙目で笑い転げる友人たちを横目に、ワインを一口流し込んだ。隣で誰かが「私は鳥」と言った。

いいよ。あんたが死んだら、次は鳥になるのを手伝ってあげる。お望みの羽をつけて、あんたが空を飛ぶのを手伝ってあげる。わたしは名もなきただのカビ。あんたが死んだあと、人間の皮膚を脱いで鳥の身体に生まれ変われるように、わたしがあんたを食べてあげる。

生まれ変わったらカビになりたい。今世での至らなさを埋め合わせるために、糸の終わりと始まりを結び止めるために、次の一生を使いたい。ピリオドを打つことは終着ではなく次の言葉を始めるための手順なのだと、理解するのに随分時間がかかった。一度うまく行かなくなったらもうおしまいだと、本気で信じ込んでいた。放っておけばダメになる白菜はキムチにしてみさえ、いいことを、なんでもっと早く思いつかなかったのだろう。

生まれ変わったらカビになりたい。それくらいのがままを許してほしい。多くは望まない。ただ生まれ変わることができるのなら、どうかわたしをカビにしてください。

大きな身体を持つこと、言葉を話し、欲があり知恵があり、肉を食べ、二足歩行で歩くこと。こうして偉く威張っていたところで、しまいには身を滅ぼすんだから、そんなものは一切捨て去りたい。生態系の最後のおこぼれを食べ、スタート地点に戻すただのか弱いカビでありたい。

どうしてそんなに簡単じゃないのだろう。今の生活は全てが遥か身の丈を超えて、まるで手に負えないような気がしていた。ワイングラスを片手に数十人の酔っ払った顔を眺めるくらいなら、あなたと向かい合って話がしたい。それとも、いつそカビになったら、そんなことどうだってよくなってしまっ
だらうか。